

中国電力高圧送電線鉄塔工事にともなう  
半分城跡横穴群発掘調査報告

1979年3月

出雲市教育委員会

## 例　　言

1. 本書は、島根医科大学への電力供給のために中国電力株式会社（以下中国電力とする）が行なった高圧送電線鉄塔工事（出雲市上塩治町内、第51号）に伴なう半分城跡横穴群の緊急発掘調査報告である。
2. 調査は、中国電力の委託事業として出雲市教育委員会が昭和53年12月11日から16日まで延べ6日を要して実施した。
3. 調査は以下の体制で行なった。

調査員 西尾克己（島根県教育委員会文化課嘱託）

川上 稔（出雲市立図書館主事）

勝部 衛（玉湯町立出雲玉作資料館主事）

調査補助員 飯国芳明、石飛公士、奥村忠孝、重本俊弘、角 真二、鳥谷芳雄、中浜久喜、野村哲也、真野 幹、山口 耕、余村達也（以上島根大学学生）

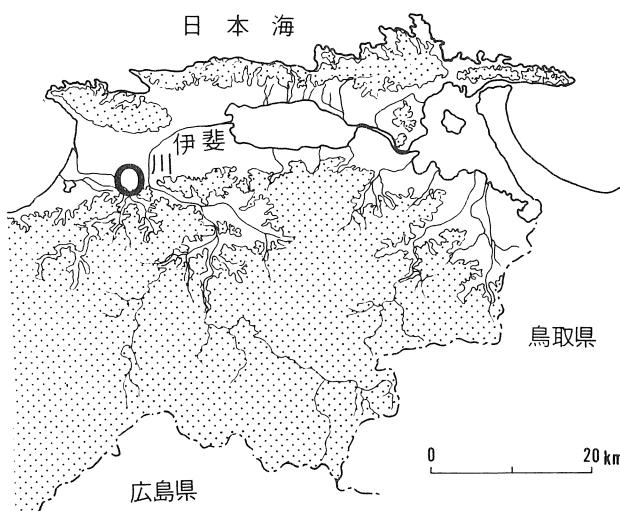
事務局 今岡 清（出雲市教育委員会社会教育課係長）

原田哲夫（ 同 主事）

4. 遺物整理、掲載図面作製およびトレース、写真撮影は調査員、調査補助員が携わり、一部については井上治夫、小原明美、宍道年弘、竹内信枝、園山和男、村上紀美子の協力を得た。
5. 本書の執筆、編集は西尾克己が行なった。
6. 調査にあたっては島根県教育委員会をはじめ、地元各位、中国電力松江支店の協力があり、また、大国晴雄、新宮一世起、西尾良一の諸氏には助力をいただいた。
7. 同時に調査を実施した大井谷城跡・半分城跡の調査報告書は別に刊行している。

## 目 次

(1)	位 置 と 環 境	2
(2)	横 穴 群 の 構 成	3
(3)	横 穴 各 説	4
	1 号 横 穴	4
	2 号 横 穴	8
	3 号 横 穴	10
	4 号 横 穴	12
(4)	小 結	14



半分城跡横穴群の位置図

## (1) 位 置 と 環 境

半分城跡横穴群は、出雲市上塩治町半分に所在する半分城西一郭の南側斜面に位置する。この丘陵には横穴群が3群分布し、同丘陵の南麓には昭和37年の島根県立出雲工業高等学校敷地造成中に発見、調査された出雲工高裏横穴群がある。この工高裏横穴群には、組合せの家形石棺(3)、石床(2)と、副葬品の金銅装大刀(1)、玉類(1)、土器等が知られている。この丘陵(註1)に分布するこれら横穴群を一括して記すこととする。

次に、本群の約500m東方にある菅沢の大井谷では17支群以上より構成される大井谷横穴群が存在し、南側に隣接した半分の三反谷では、9支群以上の三反谷横穴群が分布している。これらの横穴の多くは典型的な妻入整正家形の構造をもち、規模からしても出雲西部を代表する横穴群である。

さらに、塩治地区には整美な切石の石室と家形石棺(2)および優美な金銅装大刀、馬具類等を副葬する上塩治築山古墳、複室構造の石棺式石室と家形石棺・石床をもつ地蔵山古墳、石棺を内蔵する半分古墳がある。これら大規模古墳と前述した横穴群とは同時期のものであり、互いに密接な関係をもっていたと推定される。

その他、神戸川下流域における著名な古墳や横穴群としては、右岸の塚山古墳（横穴式石室・家形石棺）、大念寺古墳（全長84mの前方後円墳、横穴式石室・家形石棺2）、左岸の小坂古墳（石棺式石室）、刈山古墳群（横穴式石室2）、大梶古墳（石棺式石室）、放レ山古墳（横穴式石室・石床3）、妙蓮寺山古墳（全長49mの前方後円墳、横穴式石室・家形石棺）、宝塚古墳（横穴式石室・家形石棺）、天神原古墳（約30mの円墳、壊滅）、井上横穴群（6支群以上で構成）、地蔵堂横穴群などが挙げられる（註2）。また、奈良時代の遺跡としては、神門郡家と推定される天神遺跡（註3）や『出雲国風土記』所載の新造院に比定される神門寺境内廃寺や長者原廃寺がある。

以上のように、半分城跡横穴群の所在するこの地域は、古墳時代後半から律令時代にかけて出雲平野の中心地で、出雲東部の意宇川流域に比肩する程の政治力と経済基盤を有していたことがうかがわれる。

註1 地元では当丘陵を遠藤山とよんでいる。山本 清「山陰の石棺について」（『山陰古墳文化の研究』1971）にある半分遠藤山横穴は当丘陵に位置する出雲工業高校裏横穴群をさす。

註2 山本 清「古墳」（『出雲市誌』出雲市1951）、池田満達「古墳」（『出雲市の文化財』第1集、出雲市教育委員会、1965）を参照。

註3 『出雲市天神遺跡』（出雲市、1972）、『天神遺跡』（出雲市、1977）を参照。

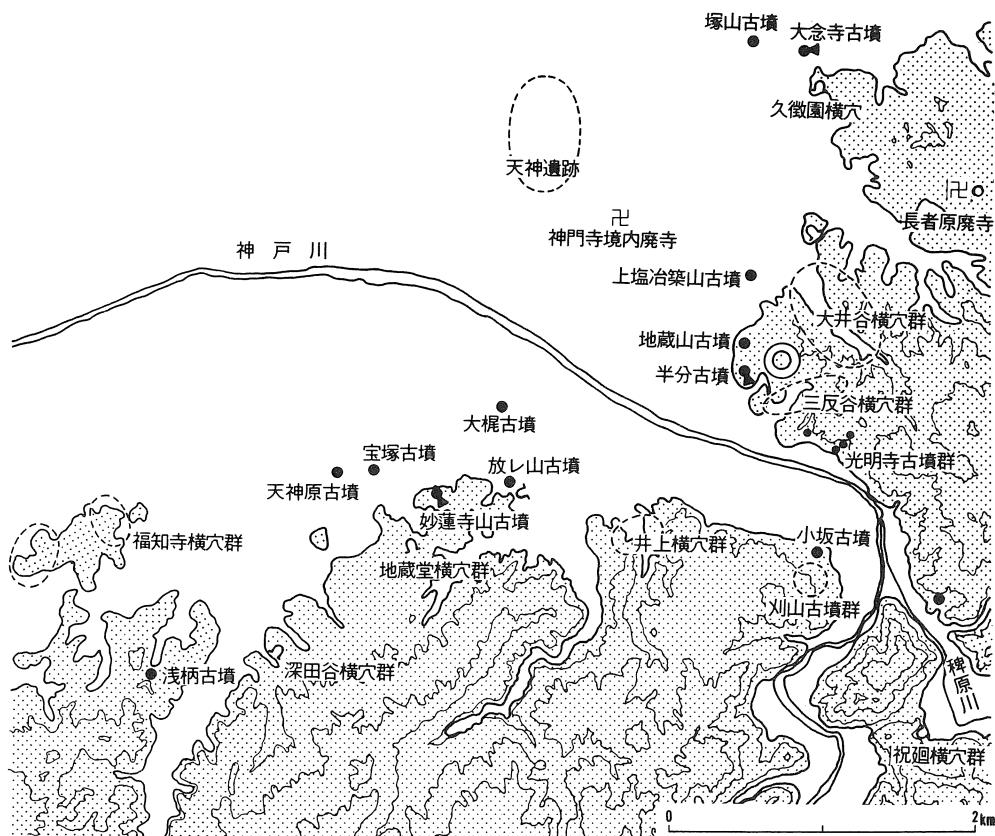


図1 神戸川流域における古墳・横穴群分布図（○は半分城跡横穴群）

## (2) 横 穴 群 の 構 成

半分城跡内に分布する横穴は、既に開口しているものでも10穴近くにのぼり、恐らく全面を精査すれば数十穴以上になると推定される。

これらの横穴は丘陵の東端から西側斜面にかけて3支群に区分される。東からA、B、C支群とすると、A群は1穴、B群は4穴、C群は2穴（1穴には組合せ家形石棺をもつ）から構成され、B群が本群となる。次に、4穴で構成する本群の各横穴は、東から1、2、3、4号と呼ぶこととする。それらの配置は図2に示したように、1、2、3号間が距離2m、比高1mを測り、4号のみが3号と近距離で高低差なく、玄室の一部が切り合い貫通している。なお、この4穴は風化した岩盤に穿たれている。

以下、1号横穴より各横穴の概要を述べる。

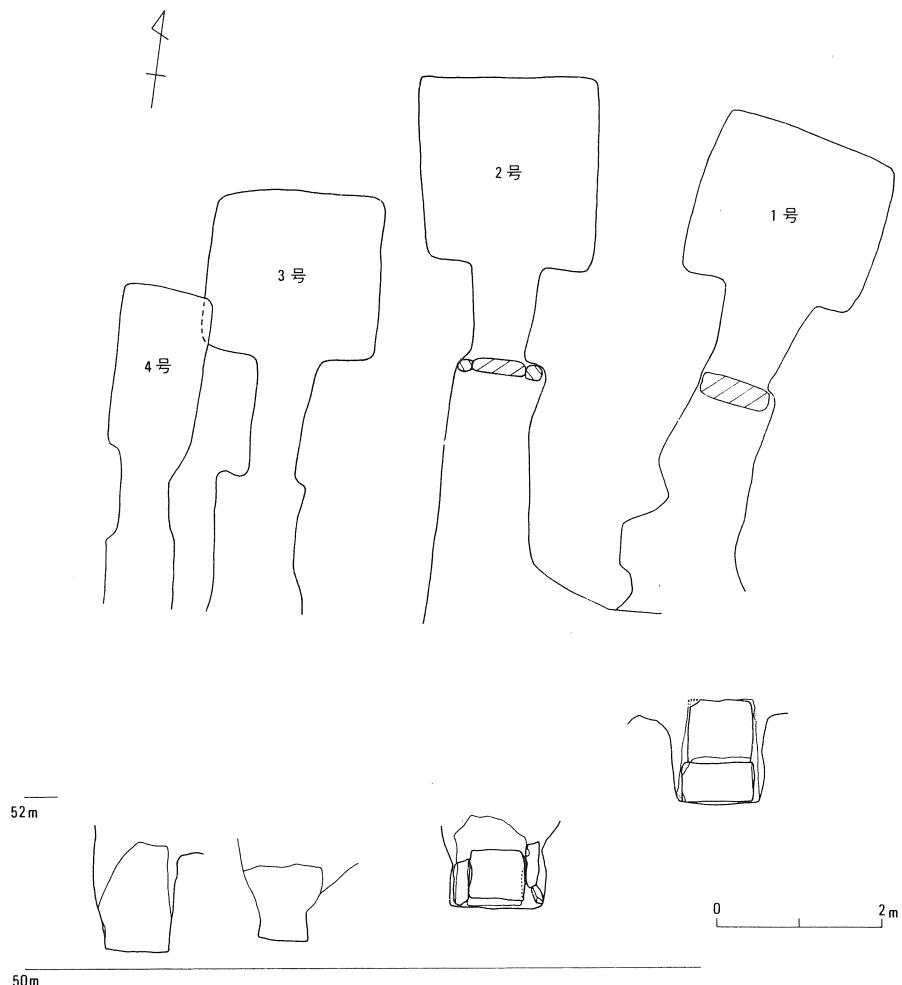


図2 横穴配置図

### (3) 横穴各説

#### 1) 1号横穴

半分城西一郭の南東隅に位置する横穴である。城をつくる際に天井が削平され、玄室内の一部も搅乱を受けていたが、全体に残存状況は良好であった。

この玄室の平面プランは正方形を呈し、壁は丁寧に削られて凹凸が少なく比較的整美な横穴である。天井と壁の界線は床の上60cm前後に明瞭に残り、整正家形のそれと同じであるが、天井を失っているのでその型態は定かではない。

羨道はドーム状に掘られ、壁は玄室同様に加工されている。羨道の入口には上下二枚からなる凝灰岩質の閉塞石をもつ。下の石は縦35cm、横90cm、厚さ20cmの細長い切石で、床に掘られた幅

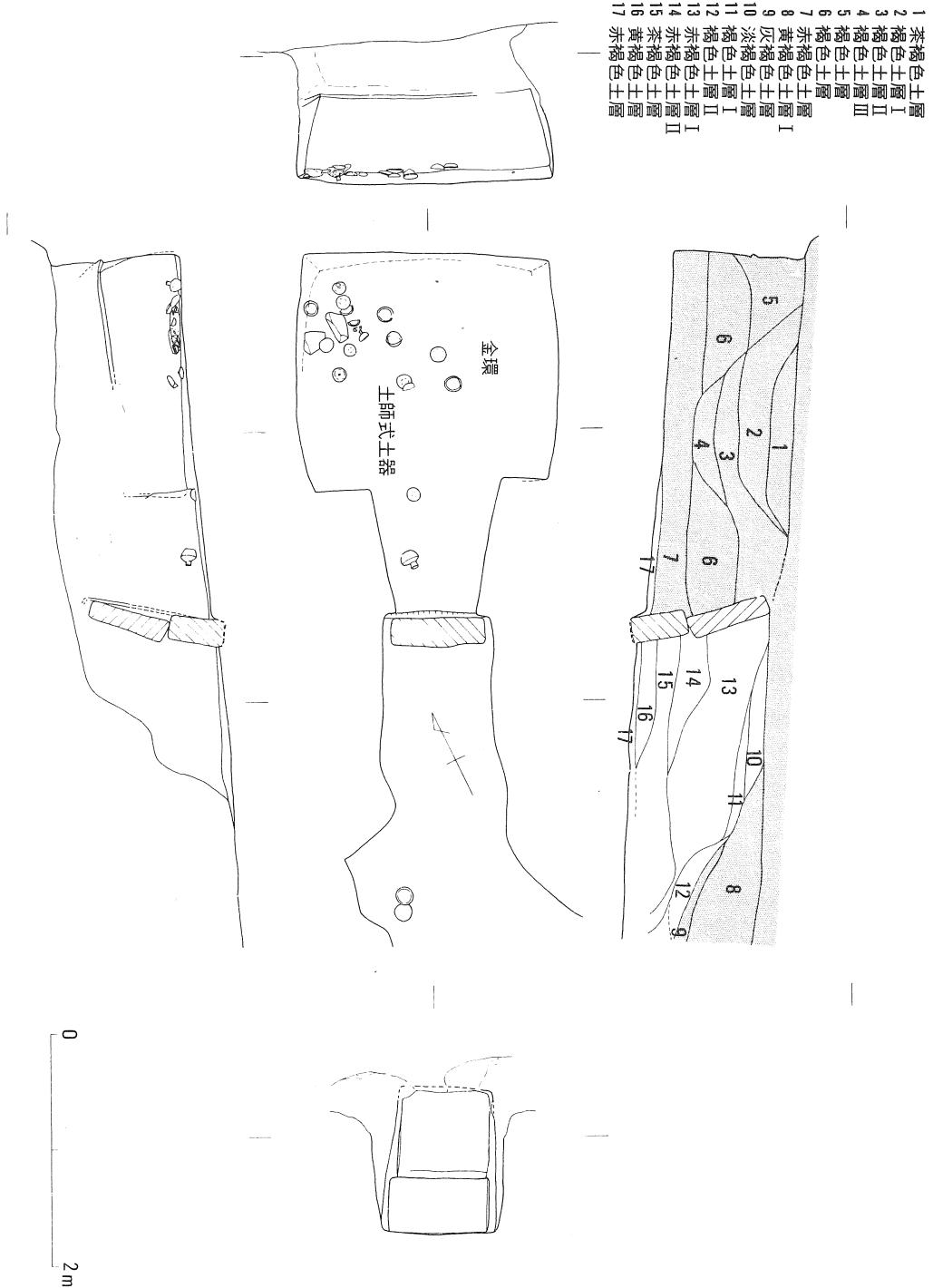


図3 1号横穴実測図

20cmの溝に据えられている。上の石は縦、横70~80cm、厚さ15~20cmの正方形の切石で、幾分玄室側の地山に傾けて置く。全面に幅2.5cmのノミ痕が明瞭に認められる。

前庭は短く先端と西側は埋葬後に削り取られ崖になっている。

各部分の規模は次のとおりである。

玄室——奥行 2.0m、幅 2.2m

羨道——長さ 1.0m、幅 0.7m~1.1m、高さ 0.9m

前庭——長さ 2.5m、幅 1.0m

堆積土の観察からすると、城をつくる以前には土砂が玄室内に流入した様子はなく、閉塞石の状態からも、この横穴が盜掘を受けた形跡は認められない。城をつくる時点で天井が壊され、玄室内に周囲の土が入り込んだものと考えられる。その後、玄室中央に径2m、深さ0.9mのピットが掘られたと推定されるが、その性格は不明である。玄室の開口時に流入したと考えられる土師質土器3、鉄釘1が他の遺物と同様に玄室の床直上で検出された（半分城の遺物の項を参照）。

副葬品は、築城時に攪乱を受け多くが破損していた。種類、数量は次のとおりである。

玄室——金環1、須恵器（蓋 4、坏 5、高坏 1、平瓶 1）

羨道——須恵器（坏 1、平瓶 1）

前庭——須恵器（蓋 1、坏 1）

蓋（1—4） 蓋（1—3）の口縁部はやや内弯し、天井部まで丸くカーブを描く。調整は、体部を回転ナデで、天井部外面は荒く、内面は丁寧なナデで仕上げている。なお、蓋(3)は「×」のヘラ記号をもつ。蓋(4)は天井部中央に宝珠状のつまみ、口縁部の内側にはかえりがつく。調整は天井部から体部にかけてヘラ削りを施す。

坏（5—11） (5)の底部は平坦で、体部はやや外開きにたちあがる。調整は外部を回転ナデ、底部をナデで仕上げる。この坏と蓋(4)はセットになる。坏（6—11）の口縁部は内傾し、受部はやや外反する。調整で口縁部や体部は回転ナデ、底部は荒いナデで仕上げ、ヘラ削りは施されていない。坏（7—11）は「×」のヘラ記号をもち、坏(6)は蓋(3)とセットになる。

高坏(12) 坏の体部は長く、底部から直立する脚は裾が大きく広がり、三方向で二段の透しをもつ。上段はヘラで切れ目を入れているが、脚の内部まで穿孔していない。下段は完全に方形透しとなっている。脚は焼成時の歪みが著しい。

平瓶（13、14） (13)は頸部が直立し、胴は強く張り出した小形品であり、肩には耳をもたない。調整で肩部にカキ目、底部はヘラ削りを施す。(14)は胴部がやや張り、肩に小さい耳を2個もつ大形品で、調整は底部がヘラ削り、その他の部分は回転ナデで仕上げる。

壺(15) 頸部は外傾しながら直線的にたちあがり、肩部はやや張る長頸壺である。調整では頸

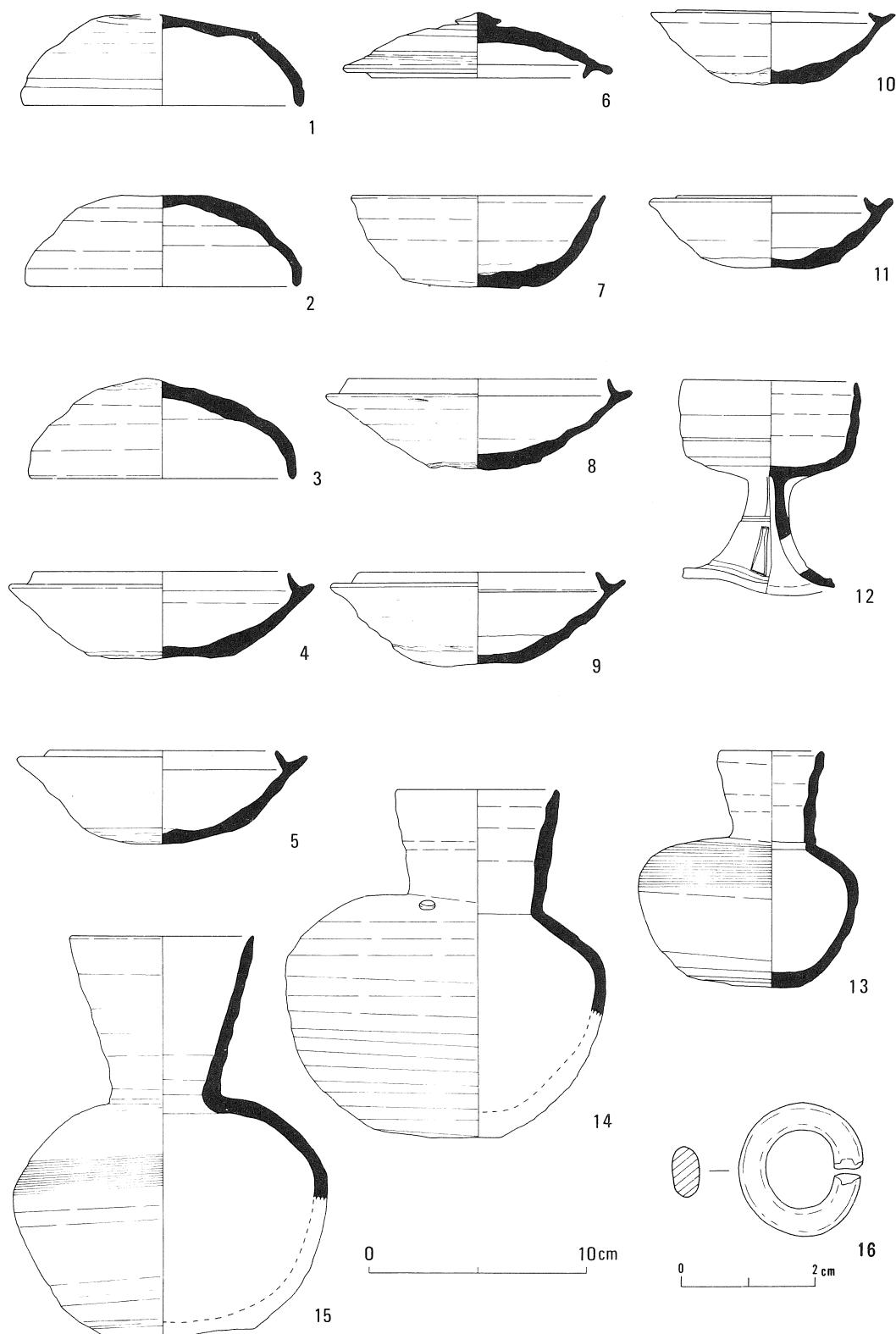


図4 1号横穴出土器実測図

線部はヨコナデ、肩部はカキ目、胴以下はヘラ削りで仕上げる。なお、頸部から胴部にかけ自然釉がかかる。

**耳環(16)** 直径 1.9cm、断面径 0.4cm の金環である。一部、鍍金が剥落し、緑錆が現われているが、全体に金の残りが良く優美なものである。対になる環は発見されず、城をつくった際に持ち去られたとも考えられる。

なお、遺構に伴なわない遺物として、一号横穴の前庭付近より弥生時代後期前半の甕と高环の破片数個が出土している。甕は口縁部に 2 条の凹線をもち、高环は脚部の裾に 2 条の凹線と 8 条の平行沈線が認められる。調整は風化が著しく定かでない。この二個体の土器はその出土地区から考えて築城の際に破壊され、主郭より現地点に移動したと思われる。また、西一郭の 11K・8N 付近でも円筒埴輪や須恵器の破片が検出されているが、これも築城時に破壊された古墳に伴うものであろう。

## 2) 2 号 横 穴

1号横穴の西隣にある比較的残りの良好な閉塞石をもつ横穴である。

この玄室の平面プランは正方形を呈し、横穴の全体はカマボコ状に掘られる。天井と側壁、奥壁との界線は明瞭に残り、家形四注式の型態をとる。天井の高さ 1m 前後で著しく低い。

羨道は玄室の妻側に位置し、玄室と同様に低く短い。羨道の入口は一号同様に閉塞石が残る。閉塞石は、床に幅 25cm、長さ 80cm の溝を掘り、その上に縦 60cm、横 60cm、厚さ 15cm の正方形の切石を据え、両側に長さ 60cm、幅 15cm の棒状の切石を置く。これらの石は全て凝灰岩質である。

前庭は 1 号と同様に細長い。各部分の規模は次のとおりである。

玄室——奥行き 2.3m、幅 2.1m、高さ 1.0m

羨道——長さ 1.1m、幅 0.6m~0.8m、高さ 0.6m

前庭——長さ 0.3m、幅 1.0~1.2m

2 号横穴で注目されるのは、玄室の天井に残る加工痕である。他の壁は凹凸が少なく丁寧に削られているが、天井には鋤状の工具で幅 10~15cm の U 字状痕が東壁から西壁へ 18 条、これに交差して棟に一条および奥壁付近に数条認められる。この様な加工痕を残す横穴は上塙治地区では稀であり、現在、出雲市知井宮町に所在する福知寺横穴群以西の神西湖周辺の比較的軟かい地山に穿たれた横穴に多く認められる。

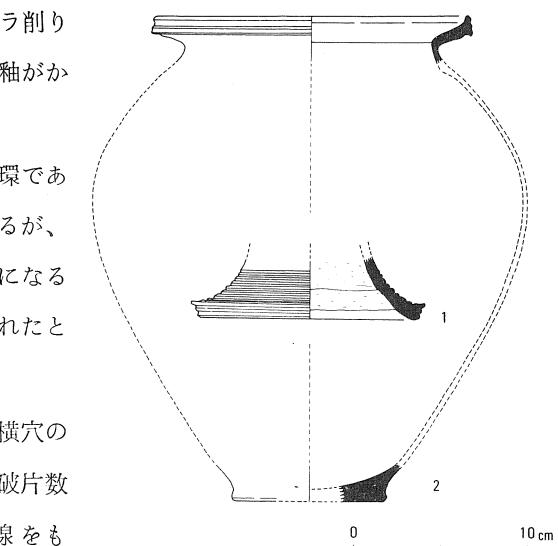


図 5 1号横穴前庭出土土器実測図

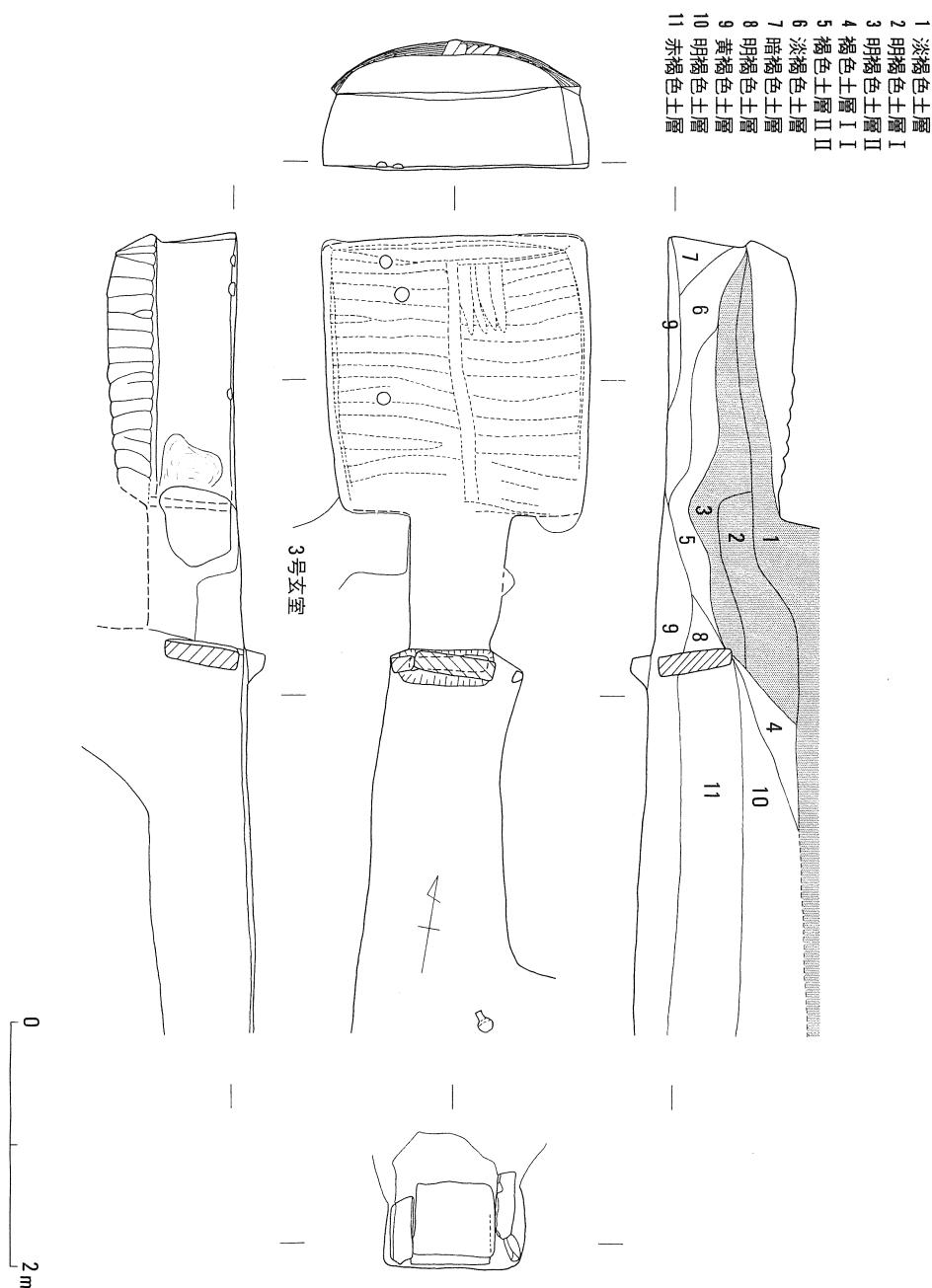


図6 2号横穴実測図

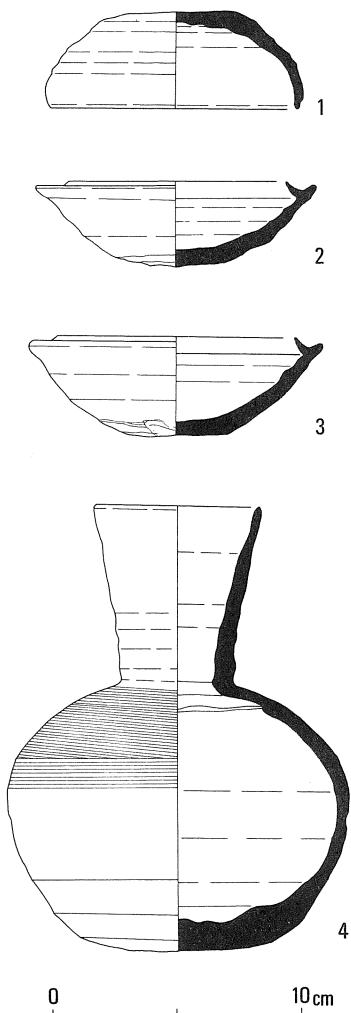


図7 2号横穴出土土器実測図

なお、堆積土の観察からすると、この横穴は城をつくる以前に盜掘を受け、閉塞石が欠損し玄室内も搅乱されたと考えられる。また、前庭には1m以上の土が堆積し、城をつくる際、周囲の土砂を突き固め、西二郭の平坦地を拡大した結果であることが知られた。副葬品は盜掘を受けており少量しか検出できなかった。種類、数量は次のとおりである。

玄室——須恵器（蓋 1、壺 2）

前庭——須恵器（長頸壺 1）

蓋（1） 口唇部がやや内傾する小さい蓋である。調整は体部の両面とも回転ナデ、天井部の外面は荒いナデ、内面はナデで仕上げる。

壺（2、3） 立ちあがりは1cm前後で短く、かつ内傾している。受部も同様に短く、やや外反し、体部の内外面には粘土紐による凹凸が残る。調整では口縁部や体部は回転ナデ、外面は荒いナデで仕上げる。なお、壺(2)は蓋(1)とセットになる。

長頸壺（4） 肩部から底部までは球形を呈しているが頸部は直線的にのびる。調整は肩部にカキ目を施し、胴部から底部にかけてヘラ削りで仕上げる。

### 3) 3号横穴

2号横穴の西にある羨道の天井部を欠く横穴である。

玄室の平面プランは1、2号同様に正方形を呈する。天井と壁との界線は存在せずかすかに段が認められるのみである。各壁面は丁寧に加工され凹凸が少い。

なお、天井の一部は城跡に伴う土塙1と、西壁の羨道付近は4号横穴とそれぞれ切り合っている。

羨道は他の横穴とくらべると細長く、前庭も長い。

各部分の規模は次のとおりである。

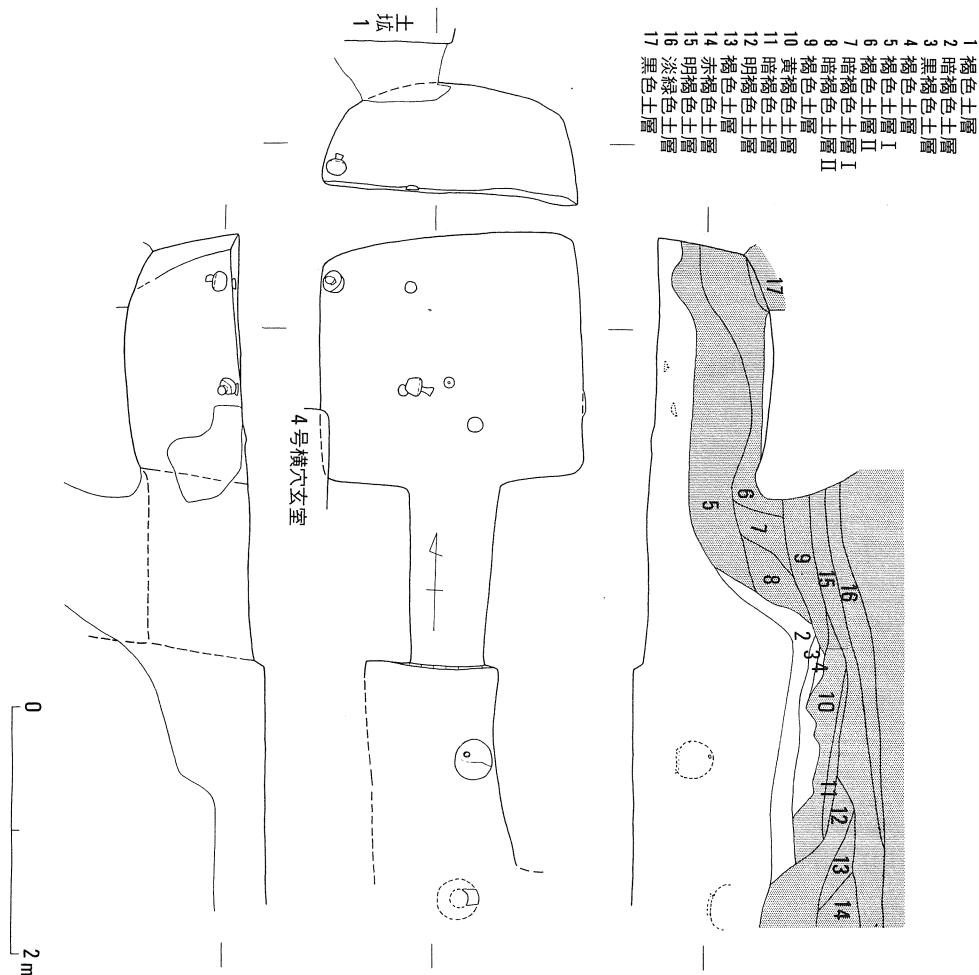


図8 3号横穴実測図

玄室——奥行 2.0m、幅 2.1m、高さ 0.9m

羨道——長さ 1.4m、幅 0.6m

前庭——長さ 1.7m、幅 1.1m

次に、堆積土の観察からすると、城をつくる以前にこの横穴は開口していたと考えられ、室内には30cm、羨道には1m以上の土砂が堆積していた。

副葬品は2号と同様に盜掘を受けて少量しか検出できなかった。

玄室——須恵器（蓋 1、壺 2、長頸壺 1）

前庭——須恵器（甕 2）

蓋（1—4）蓋（1—2）は口縁部がやや内傾し、天井部まで丸くカーブを描く。調整では、体部は回転ナデ、天井部外面は荒いナデ、内面はナデで仕上げる。蓋(3)は口縁部がやや外反し、天

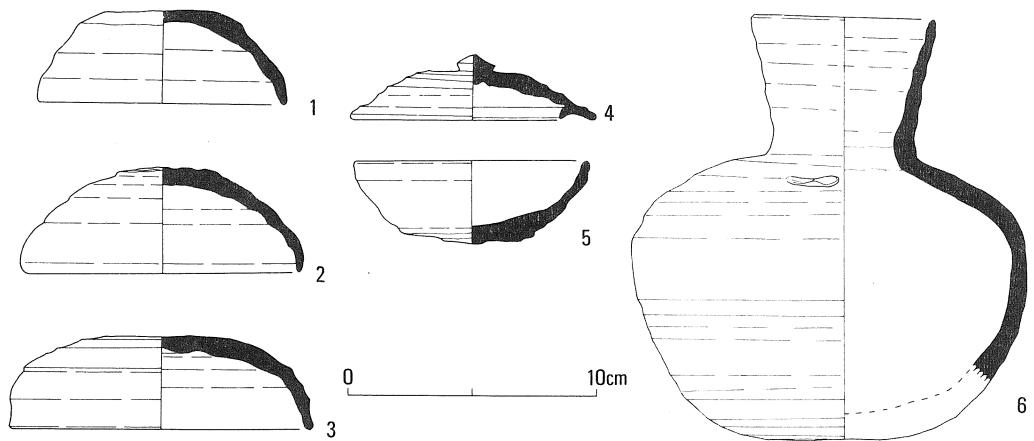


図9 3号横穴出土土器実測図

井部と体部の境界に段をもつ。調整は口縁部から体部は回転ナデ、底部は外面はヘラ削り、内面はナデで仕上げる。蓋(4)は天井部中央に宝球状のつまみ、口縁部の内側にかえりがつき、天井部はヘラ削りを施す。

壺(5) 小形品で口縁部から底部まで丸くカーブを描く。調整は口縁部から体部までは回転ナデ、底部の外面は未調整で凹凸が著しい。

なお、この壺は蓋(4)とセットと推定されるが、蓋の可能性もある。

平瓶(5) この平瓶は体部に比べ口縁部が小さく、その上、口縁部を体部の中央近くで接合している。肩部には小さい耳が二個ある。調整では底部表面をヘラ削りで施し、他は回転ナデで仕上げる。なお、口縁部から肩部の一部分に自然釉がかかる。

甕(1、2) 甕(1)は小形品で口縁部を欠く。表面全体に格子文、内面には青海波文のタタキが多量に残る。また、焼成後、底部に径約50cm大の穴を穿孔している。甕(2)は大形品で、口縁部は大きく外反し、段を有する。この甕は口縁部は回転ナデを施し、他は甕(1)と同様である。なお、この甕は埋葬時に伏せて置かれたため、肩部以下がその後破損されている。

#### 4) 4号横穴

3号横穴の西側に接して存在する小形の横穴であり、天井の多くは破壊されている。この玄室

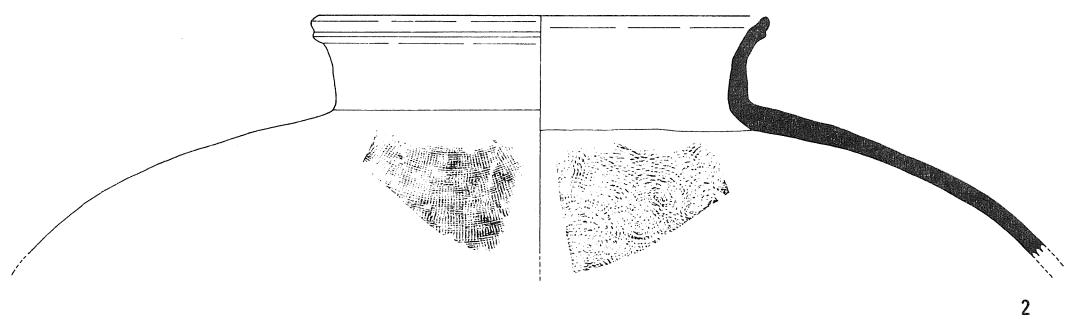
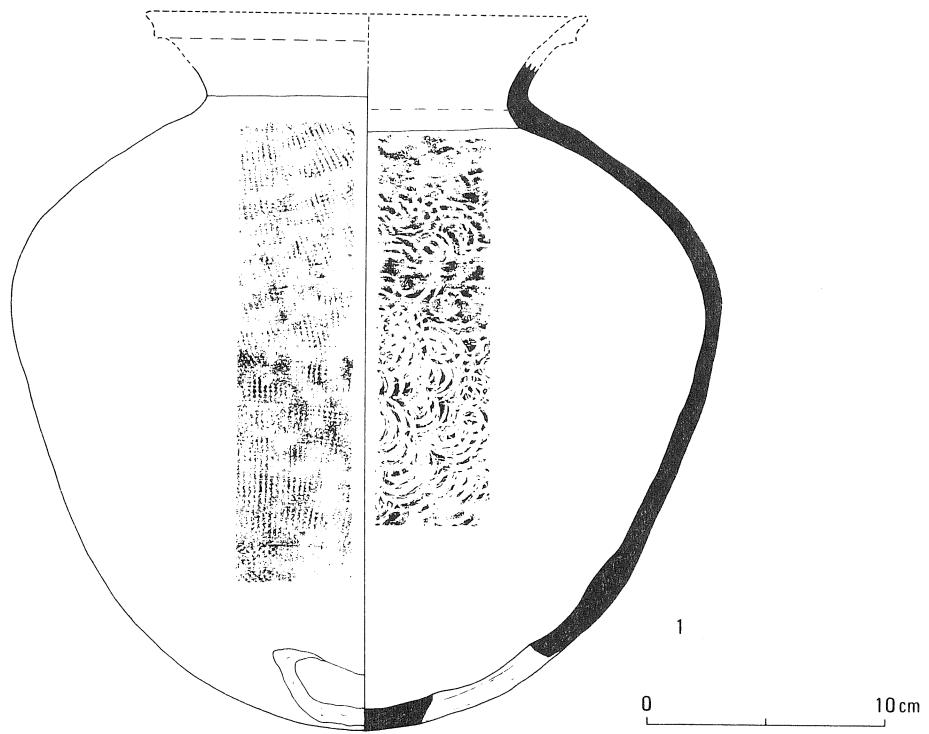


図10 3号横穴前庭部出土土器実測図

の平面プランは奥に長い方形を呈し、玄室全体はカマボコ状に掘る。各壁面は丁寧に加工されて、現存する天井は丸く削られているが、奥壁の左側に稜線があり天井と側壁の界線は明瞭に残る。これらの点より、一応家形の横穴と考えられる。

羨道は短く、天井を失っている。前庭は一部のみ調査しているので詳細はわからない。

各部分の規模は次のとおりである。

玄室——奥行 2.0m、幅 1.0m、高さ 0.9m

羨道——長さ 1.0m、幅 0.6m

この横穴の玄室内には軟かい黄褐色土層が多量流入しており、城をつくる以前にこの横穴は開口していたと推定される。一方、前庭は他の横穴と同様に旧表土上に幾層もの土が版築されていた。

なお、遺物としては数個の須恵器壺片が出土している。

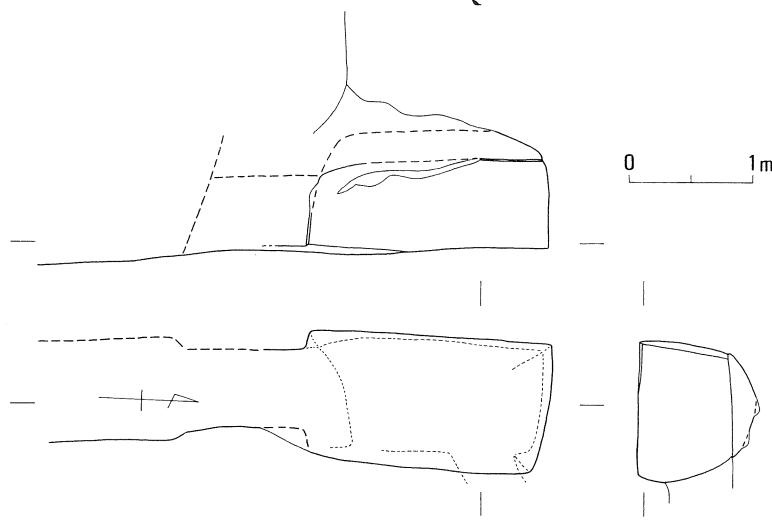


図11 4号横穴実測図

## 小 結

半分城跡内に所在する横穴群と出雲工高裏横穴群とは遠藤山全域を墓域として共有する一大横穴群であり、現在20穴近くが確認されている。今回調査を実施した半分城跡横穴群はこの支群の一つとして把握されるもので、4穴が近距離にあってまとまりをなしている。

さて、本横穴群の形態については規模や加工方法に若干の差がみられるが、平面正方形か長方形の床に丸、ないし家形の天井を有する玄室をもち、羨道は短く妻側に位置する。この様な形態をもつ横穴は出雲西部、とりわけ神戸川流域には多くみられる。しかし、前庭部が細長い点や閉塞石が上下二枚から成る点などは、本横穴群に特有なもので、内側に幾分弯曲する壁や2号横穴の天井に残る加工痕は上塩治一帯の横穴では稀な例である。これは岩盤（地山）の硬軟の差から生ずる工具と掘窄法の違いによるものと考えられ、神戸川西岸一帯の横穴にはよくみうけ

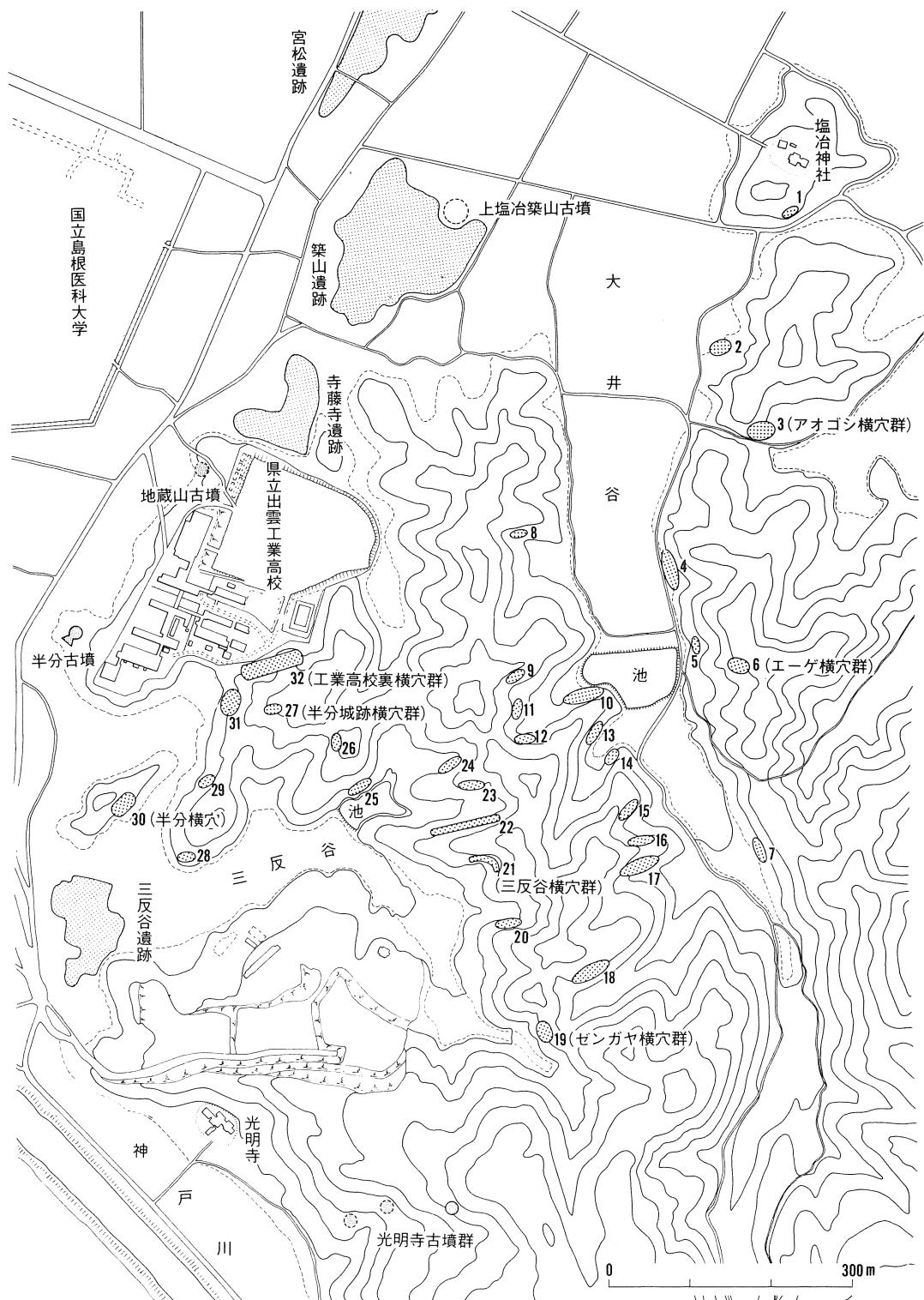


図12 半分城跡横穴群と周辺の遺跡

られる。

ところで、各横穴とも既に搅乱、盗掘を受けており、埋葬時の状況や追葬の有無を明確にし得なかったが、幸い1～3号横穴からはかなりの量の須恵器が検出された。須恵器のうち蓋坏は古くからのものと、かえりやつまみをもつ新たなものとが共伴している。手法では削りや糸切は認められず、また、高台も有しない。これらの点より山陰須恵器編年の第IV期前半(註1)に該当し、古墳時代後期後半に属する。この時期の出雲平野は横穴の盛行期であり、大規模な横穴群はほとんどこの頃に築造されている。

また、3号横穴前庭には二個の甕が伏せて置かれている。一個は口縁部を欠損され、底部には焼成後の穿孔が認められ、呪術的な意図が窺える。横穴前庭へ壺、甕、埴輪を置く例は多くあって当時の埋葬儀礼において前庭がかなりの重要な役割を果していたと思われる。

なお、半分城跡背後の丘陵に、図12に示すように数多くの横穴群が分布している。これらは規模・内容とも極めて類似しており、一連の横穴群と推定できる(註2)。今後、各群の構成や内容を明確にし、付近に点在する大規模古墳との関連もあわせて、これらの横穴群の歴史的位置づけを行なわねばならない。

註1 山本 清「山陰の須恵器」（『山陰古墳文化の研究』1971）

註2 上塩治町菅沢・半分に分布するこれらの横穴群を一括して上塩治横穴群とよび、今後、半分城跡横穴群は上塩治横穴群27支群、工業高校裏横穴群は32支群とする。

図版 I



半分城跡横穴群発掘風景（西より）

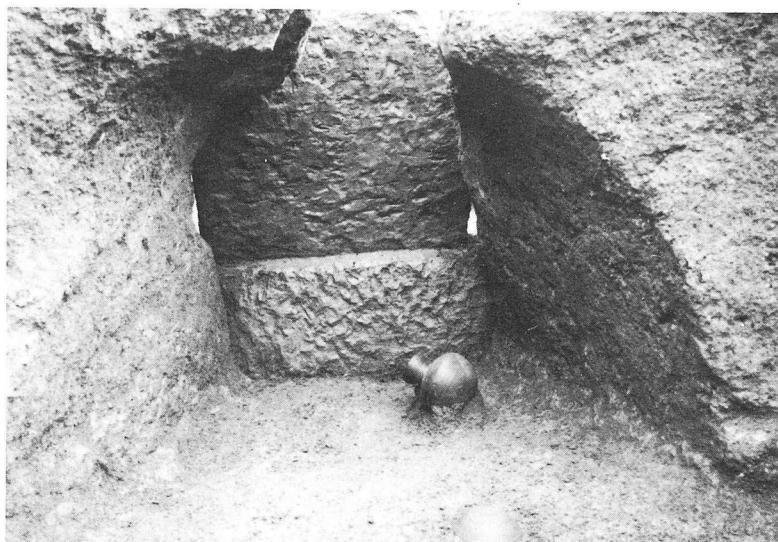


半分城跡横穴群全景（西より）

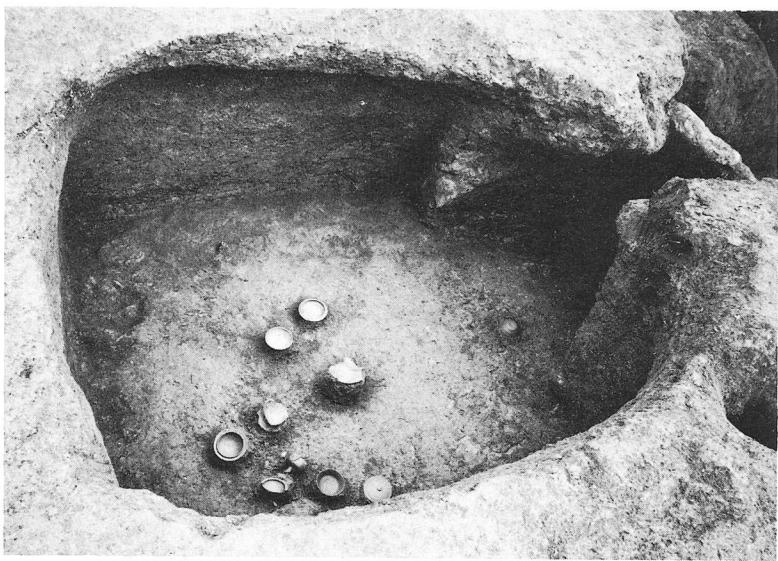
図版 II



1号横穴の閉塞  
状況（前庭より）



1号横穴の閉塞  
状況（玄室より）



1号横穴の玄室  
と遺物出土状況  
(北より)

図版Ⅲ



2号横穴の閉塞  
状況（前庭より）



2号横穴の玄室  
と土器出土状況

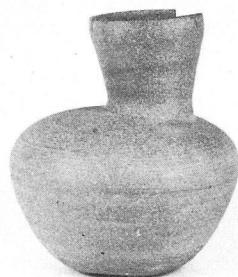


3号横穴の土器  
出土状況

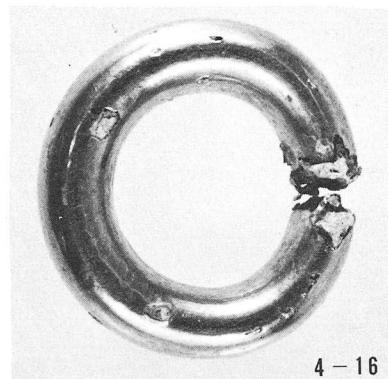
図版IV



4-12



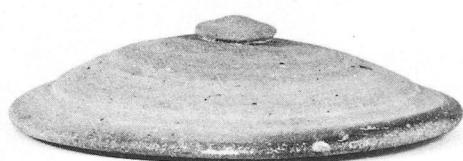
4-13



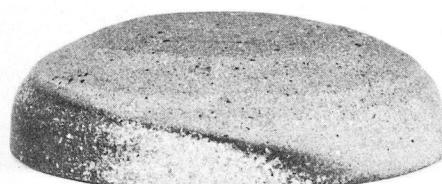
4-16



4-1



4-6



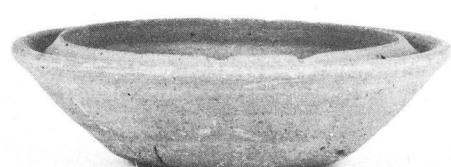
9-3



4-7



4-5



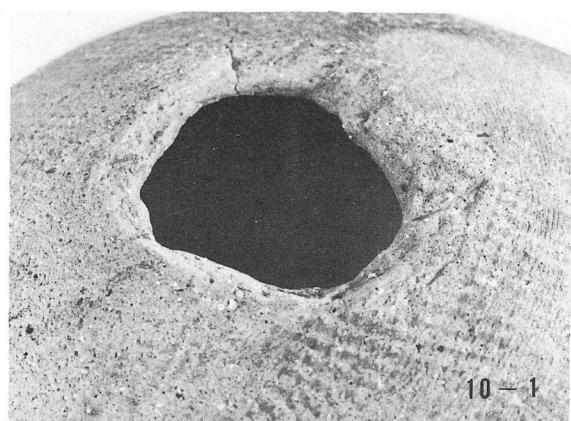
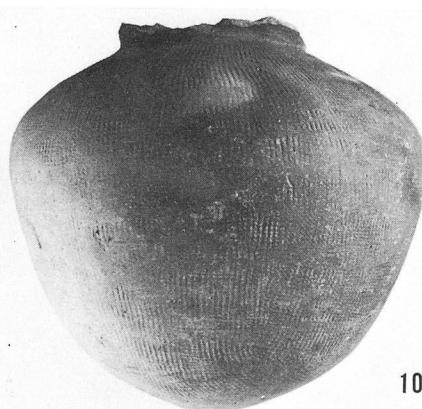
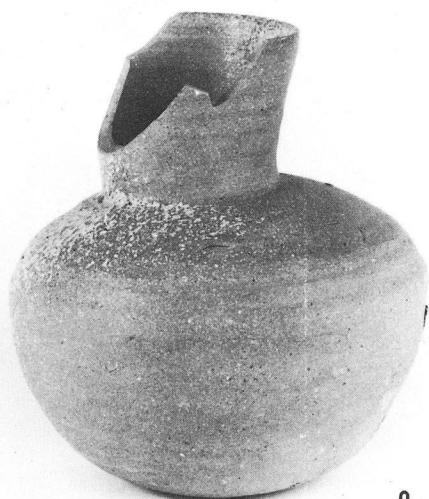
4-11



7-2



7-3



半分城跡横穴群出土遺物 (2)

中国電力高圧送電線鉄塔工事にともなう  
半分城跡横穴群発掘調査報告

1979年3月発行

発行 出雲市教育委員会

印刷 株式会社報光社